

### グローバル化と哲学の課題：「文化哲学的批判」の意義

MAKINO, Eiji / 牧野, 英二

---

(出版者 / Publisher)

法政哲学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of Hosei Society for Philosophy / 法政哲学

(巻 / Volume)

4

(開始ページ / Start Page)

43

(終了ページ / End Page)

56

(発行年 / Year)

2008-06

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007920>

# グローバル化と哲学の課題

——「文化哲学的批判」の意義——

牧野 英二

## 一 問題提起

本稿の主題は、グローバル化時代に生きる「われわれ」が直面する哲学の課題の中で、とりわけ「精神科学」と深くかかわる問題点を考察することにある。今日、この課題に取り組むためには、哲学的な議論は、いわゆる「言語論的転回」(linguistic turn)及び「解釈学的転回」(hermeneutische Wende)以後の「生の地平」の現状を踏まえることが不可欠である。結論を先取りして言えば、ここでの筆者の意図は、錯綜した現代社会の中で他の国民・他の民族・他の文化圏

や他の価値観を有する人間の間で「共有可能な」哲学的思考の可能性を探究することにある。筆者は、とりわけ広義の文化論的・文明論的次元での錯綜した問題状況が、加速化するグローバルバリエーションの流れの中で、普遍主義的言説と相対主義的言説との緊張関係をますます高めてきた、と考えるからである。こうした問題状況は、筆者の見解によれば、従来の哲学的考察方法では問題の解決どころか、問題の所在そのものを的確に捉えることを困難にしている。そこで筆者は、本稿の考察では従来の学問的方法とは異なる「文化哲学的批判」が必要であると考える。誤解のないように予め注意を促しておけば、この場合、この試みは、

哲学を含む諸学における「言語論的転回」及び「解釈学的転回」と矛盾対立するものではない。それは、むしろこれらの「転回」を踏まえ、かつ方法的にそれらを内に含む、新たな「文化学的転回」(Kulturwissenschaftliche Wende)のもので「歴史的な生の地平」を理解する方法的営みである。

したがって次に、今日こうした新たな「批判の試み」の必要性と、この試みを遂行する際に採用する哲学的思考の方法的意義とについて言及する必要があるだろう。このことは、今日の「哲学」及び「哲学研究」の危機的状况に対する自覚を改めて促す試みでもある、と言つてよい。そこでまず、筆者と同じ認識や危機感を抱く一人の哲学者の発言に耳を傾けることから議論を開始してみたい。

## 二 哲学の危機とその原因

数年前、坂部恵氏はある書物の中で、日本の哲学研究の現状を次のように慨嘆されている。「哲学とは、いわばそれ自体意味を乱反射するシステムであるから、それについて「何であるか」を語ることはほとんど無意味に近い。あるいは端的に不可能である。／と、こう現代思想風に格好よく語りはじめると、身も蓋もない。身も蓋もないのが現代思想の多くのありかたであり、身も蓋もなくとも、せめて

底だけは中空に浮遊しているがごとき幻にすがって仕事をせざるをえないところに、現代の思想・哲学は追い込まれているからである」<sup>(1)</sup>。

すでに十数年前に筆者は、同様の見解を拙著の中で展開し、哲学研究者に哲学の危機を警告したことがある<sup>(2)</sup>。しかし、残念ながら、この警告は、数年前までは特定少数の研究者の間での共通認識にとどまり、多数がこうした危機感を抱くようになったのは、この数年のことである。だが、ここではこの問題には立ち入らず、上記の坂部説の見解をもう少し辿ることにしたい。

では、坂部説は、今後の哲学及び哲学研究の見通しについて、どのような見解を有しているのだろうか。その疑問に答えるかのように、坂部氏は、こう述べている。「老舗の大学に今なお残る「哲学科」は、文字通り前世紀の遺物と化していく感があるが、あと半世紀くらいは暖簾をまもつて、台風の目のような静けさを維持してほしいものである」<sup>(3)</sup>。

さらにそのための対応策として、氏は「人間らしく生きる術としてのフマニスムス」の重要性を指摘されている<sup>(4)</sup>。具体的には、「ディシプリンやディヴィジョンとしての哲学にたいして、アート、ないし人文主義者のたしなみとしての哲学は、すくなくともその余白・マージンに存在を認

められるべきものだろう」(5)、と述べている。

筆者は、上述の坂部説に基本的に賛同する。さらに筆者の見解を付け加えれば、第一に「哲学の危機」は、「人文学の危機」と不可分であり、第二に、この問題は、日本やアジアだけでなく、ヨーロッパを含む、学問のグローバル化現象の一環である、と見るべきである。第三に、興味深いことに、ヨーロッパ及び東アジアの研究者は、日本の研究者にはこうした危機感が薄くまたは危機感がないと認識している事実がある(6)。第四に、クリムスキーが指摘するように、大学に蔓延しつつある研究・教育・社会貢献と分離した「アリバイ作り」、「物取り主義」が、哲学を危機に陥れてきたのである。さらに言えば、いっそう危機的な事態は、その自覚すらない研究者が少なくないことにある(7)。

そこで本稿で筆者は、これらの事実を踏まえて、「哲学の危機」及び「人文学の危機」を主体的に受け止めながら、内容的にも制度論・組織論的にも、こうした問題の所在を抉出する方法を採用する。それによって、筆者の立場から以下の諸課題に対する解決の方向性を提示する。第一は、哲学の現状認識にかんする問題であり、言い換えれば、「哲学以後」(After Philosophy)の課題の的確な把握にかんする事態である。第二は、今後の哲学の存続の見直しにかんする問題である。第三の課題は、その有効な対応策にかんす

る提案である。これらの課題に取り組むことによって、筆者は、独自の立場から、坂部説が提起した「人間らしく」生きる術として、坂部説が踏み込まなかったグローバルな規模で蔓延する「コスト主義の病」に対する「処方箋」の実現に努めたい。

### 三 普遍主義的言説と相対主義的言説との相克

以上の諸課題は、一言で要約すれば、あらゆるレベルでグローバル化が進行する今日の状況下で、哲学の相対化・無力化の現状の認識と、ある種の普遍性の再構築、他の諸学とのいっそうの連携と哲学が果たすべき総合的な機能の発揮などにある。ここに本稿で筆者が、とりわけ哲学探究における「文化学的転回」の必要性を強調する第一の理由がある。第二に、この新たな思考法の転回が求められる理由は、知のグローバル化現象の結果、一方で英語帝国主義的発想及びそれと不可分な普遍主義的言説の支配に対する文化批判的試みにある。第三に、他方、欧米の哲学・思想とそれにかんする方法のアンチテーゼとして台頭した、ローカリズムないしリージョナリズムに孕む問題性がある。したがって問題は、普遍主義か、地域主義かという二者択一にあるわけではない。言い換えれば、問題は、しばしば

指摘されるように、単一文化主義と多文化主義との対立に収斂されてはならないのである。第四に、普遍主義的言説と相対主義的言説との相克に坎んする問題は、後述のように、歴史的・社会的文脈の中でのみ解決可能である。

ところで筆者は、最近、韓国と日本との間の税制度をめぐる歴史的影響関係から法の「正義」の問題を扱ったことがある<sup>(8)</sup>。この論考でも指摘したように、真の課題は、普遍主義的言説と相対主義的言説との対立、単一文化的見解と多元主義的文化との対立の生起する地平を精査し、その起原を探索して、問題の所在を解明することにある。端的に言えば、グローバリ化時代の哲学の課題は、まさにこの点にある。そこで以下の論考では、課題の性質上、一般的な論考のスタイルである問題解決型の考察方法を採用せず、敢えて問題提起型の考察方法を採用する。それによつて、グローバル化時代の哲学的課題の一端を照らし出すことにしたい。そこで本稿の主題に限定して、今日求められる「文化哲学的批判」の確認作業を行なう。

#### 四 文化批判と歴史的な生の地平

次に、上記の批判の試みが向けられる「歴史的な生の地平」の探究に進むことにする。それによつて、「生」および

その探究に不可欠な精神科学の射程を測定する。まず、本稿の主題に直接関連する範囲で、近代以降の主要な哲学者の「生」および「地平」概念の射程とその意義を考察する。

また、その場合、「言語論的転回」、「解釈学的転回」以降の「新たな転回」の可能性もまた、明らかにされるはずである。なぜなら、従来の言語分析・言語解釈の方法から新たな言語批判への転回もまた、不可避となるからである。

さらに、それらの営みは、かつてカッシーラーが唱えた「哲学と心理学の再婚」<sup>(9)</sup>という発想から、自然科学との統合の可能性への道が開けていくと思われるからである。ただし、その場合、哲学全体の営みを科学哲学的立場、とりわけ心理主義的哲学の立場に縮減させないことが必要である。

以上の問題提起は、本稿の主題に即して次のような諸課題に再定式化が可能である。第一の問題提起は、グローバル化時代における「普遍主義的言説」に依拠した哲学の妥当性の吟味にある。第二に、この課題は、グローバルゼーションの現状を把握できない従来型の「文化研究」、「比較思想研究」、「国際……学研究」などの方法論では対応できないという自覚が必要である。第三の課題は、普遍主義的言説の対抗原理としての「文化相対主義的言説」の妥当性が批判的に吟味されることを要求している。第四の課題は、哲学・思想の用語や日常生活で使用されている言語・文章

の翻訳の可能性／不可能性・対話の可能性／不可能性の問題と不可分である。言い換えれば、この問題は、特定の文化や伝統のなかで生きる人間を制約し表現し理解する「言語」を「文化批判」の立場から吟味・検討する。結論から言えば、この課題は、「バベルの塔」という表現で象徴される事態か、それとも「モノグロシア」というそれであるかという問題に収斂されてはならないのである。

したがって問題は、言語が「事実」を隠蔽し歪め、差別や偏見を支え増幅させる「文化事象」に対して、明敏な分析の刃を向けることが必要である。なぜなら、従来の「言語論」や「解釈学」の哲学的反省は、これらに対して十分有効に批判する観点を確保できないからである。具体的に言えば、誰が・どこで・何を・どう語るのか。その効果・誤解・反発などについて、深い歴史的・社会的現実に対する自覚が必要であり、それを科学的に「客観的立場」から「解釈し理解する」ことは非現実的だからである。また、この事実に関連して、従来の言語遂行論ないし言論論が適切に把握できなかった「当事者主義」の陥穽をめぐる問題も無視できないであろう<sup>10</sup>。

上記の観点から明らかなように、「言語論的転回」や「解釈学的転回」以後の現代の哲学的問題に取り組みむ場合には、「文化学的批判」によって人間の生きる立場、「生の地平」

(Horizont des Lebens)と、そこでの諸システムの機能を吟味・検討することが焦眉の急の課題となる。これらの目的を遂行するためには、「文化」「文化批判」の概念や射程を拡大・深化させる必要がある。

## 五 生の哲学と生の地平をめぐる解釈の陥穽

この課題に取り組みむ場合に、留意すべき第一の論点は、従来の哲学史における常識と化した通説の陥穽にある。それは、「生の哲学」に対する誤解ないし無理解と偏見にある。その主因の一つは、リッカートによるデイルタイ批判の影響である。この生の哲学に対する歪曲された批判は、ハイデガーのデイルタイ評価にも深刻な影響を与え、その後の哲学史に決定的な盲点を生み出してきた。第一次大戦後における生の哲学の歴史的位置づけに対して反旗を翻したのは、カッシーラーとアーレントであった。この点で、二人の優れたユダヤ系哲学者は共通点を有する。しかし、この二人の「生の哲学者」に対する位置づけをめぐる新たな見解は、この概念を否定的に評価する点で哲学史の既存の枠組みに依然として囚われている。他方で、両者には極めて特異な相違点がみられる。そこで、本稿の考察の範囲内でこの二つの論点に一瞥を投じておきたい。

アーレントによる生の哲学に対する評価は、きわめて特異な見解を示している。彼女は、生の哲学を終始批判的・否定的に解釈する。「近代の生の哲学の最大の代表者」として、マルクス、ニーチェ、ベルクソンの名を挙げている<sup>11</sup>。しかし、なぜかデイルタイの名前は挙げられていない。また、彼らを批判的に評価する最大の理由は、彼らが生命と存在とを同一視し、これを内省から得ている点にある。また、アーレントは、彼らが活動それ自身に関心をもっていないことを批判する。この場合、アーレントの重視する活動 (action) とは、彼女の独特の意味が付与された政治的活動であり、自由な他者との言語行為である。

他方、アーレントとは対照的に、一九九〇年代に入るまで祖国ドイツでは本格的な研究書を見出すのが困難であったカッシーラーは、その後の研究の進展によりハイデガーの影響からの呪縛から徐々に解放され、正当な評価が見られるようになった。それと関連して、カッシーラーによる独自の生の哲学に対する批判の視点も明らかにになった。現代哲学のその後の展開に決定的な影響を及ぼしたスイスのダヴォス討論の相手であったカッシーラーは、後にハイデガーを「生の哲学の代表者ハイデガー」<sup>12</sup>と位置づけている。また、彼は、現代社会の困難が「生の充実としての文化」と「現代における生が人間の思想と文化との種々な

領域に分裂していくという問題」にあると指摘している。この指摘は、今日でもなお重要な問題提起を含んでいるように思われる。それだけに、カッシーラー説の妥当性は、改めて本格的に検討されなければならないであろう<sup>13</sup>。

そこで次に、哲学と地平にかんする批判的検討に考察の焦点を定めよう。最初に、哲学史の通説の危うさを指摘して、それが今日まで問題の所在を隠蔽する機能を果たしてきた事実を明らかにする。まず最初に、ある特殊専門的な哲学の事典的説明の危うさを確認する<sup>14</sup>。そこでは「地平」について、こう論じられている。「この言葉はカントにも現れるし、フッサールの独特の概念とはいえないが、しかし、この概念に独自の意味を盛り込み、使いこなしたのにはフッサールである。もともと、意識の構造のうちに地平は見いだされている。」この論述では、カントへの具体的言及がまったく欠落しているだけでなく、デイルタイ、ニーチェへの言及もなく、さらに概念理解におけるフッサールの位置づけも誤っている。それだけでなく、この論述は「地平」を意識構造に即して解釈する意識中心主義の困難に陥っている。ここで筆者は、たんに哲学的な説明の不十分性を問題にしているのではない。むしろ、この種の解釈がグローバル化時代における哲学的問題の所在そのものを隠蔽する機能を果たしてきた点を批判したのである。そこ

で以下では、この点について具体的に検討してみたい。

第一に、カントの「地平」解釈を手掛かりにして、上記の見解の論証を試みる。まず最初に、純粹理性の批判と「地平」の分析からみてみよう。カントは、「独断論の思弁理性が、人間認識の「地平」の外部に」超出したのに対して、懐疑論は、人間理性のあらゆる問題を「人間理性の地平の外に放逐する」(B, 787)ことで、この問題を解決したと誤解した、当時の両思潮を批判した。ここで「地平」概念は、純粹理性の批判によって企図された超越論的な概念である。

第二に、他方で、カントは、それとは異なる立場から「地平」の機能を次のように論じている。「他者の地平を自己の地平からみて測つてはならず、われわれにはなんら利益とならないことを無益とみなしてはならない。他者の地平を規定しようと欲するのは向こう見ずというものである。ひとは一つには他者の能力を、一つには他者の意図を十分に知っているわけではないからである」(X, 43)。ここで「地平」概念は、人間の生活の場に根差した視座の重要性を明らかにしている。

第三に、カントは、第二の視座を解釈学的方法として自覚的に論じている。「われわれが注意しておきたいのは、普通の会話でも、著作でも、著者が自身の対象について述べている思想を比較することによって、著者が自分自身を

理解しているよりも、それ以上によく理解するということがけつして珍しいことではない、ということである」(B, 370)。ここには、明らかに超越論哲学的思考とは異なる解釈学的方法の意義が明示されている。カントには、「地平」概念の用法にかんしても、これら二つの異なる思考の方法が存在する。この二つの思考の特徴は、現代の文脈に即して表現すれば、超越論哲学的な普遍主義と解釈学的な相対主義の両面性をめぐる問題として定式化できる。

第四に、カントとの関係からみたデイルタイの歴史的理性と「地平」の限界について、簡単に触れておきたい。まず、解釈学的方法にかんする両哲学者の見解をめぐる論争問題についてである。周知のように、デイルタイは、『解釈学の成立・遺稿』のなかで精神科学の方法にかんする基本姿勢を次のように定式化した。それは「著者が自分を理解した以上に、よりよく理解するという規則」(V, 35)である。両哲学者のほぼ同一内容の見解については、オットー・ボルノウラのデイルタイ学派によるカントの解釈学的見解を否認する傾向が一般的である。しかし、今日ではこの解釈の妥当性は、大いに疑わしいことが指摘されている。

最後に、この問題と不可分の「地平」の働きについても、デイルタイとカントとの親近性が指摘されなければならぬ。デイルタイは、『精神科学における歴史的世界の構成』

のなかで「私は生の地平 (Lebenshorizont) とはある時代の人間がその時代の思考・感情・意欲と関連して生きる限界づけ (Begrenzung) であると理解する」(VII, 177)、と明言している。だが、現代の文脈から見た時、デイルタイによるこれらの主張は、今日の歴史主義・相対主義と論理主義・普遍主義との対立を克服しうる可能性をどこまで提示しうるであろうか。この問題は、今日依然として未解決の重要な哲学的課題に属する。

これらの問題を言語使用の記号論的意味と関連づければ、それらは、対話および理解における言語的機能の地平にかんする課題であることが明らかである。それは、第一に、「発話者と聞き手との対応」の問題であり、第二に、「物的なテクストにおける筆者と作品との関係」をめぐる問題である。第三に、ある言語を理解する (Verstehen) ことは、それに習熟する (Beherrschen)、「つぎの (Können) 」ことであり、生きる世界での事柄と人間との生の連関 (Lebenszusammenhang) をなすという点が重要である。

## 六 文化的差異と「地平」における言語の機能

以上の考察から、以下の諸点が明らかになった。第一に、人間の一定の見方や考え方、伝統や文化に制約された状態

と言語・思考様式・世界観の制約に関する問題である。すなわち、これらの「地平」や「地平線」は、人間の周囲を囲繞して人間の視野や生活様式を境界づけている。第二に、こうした自己と他者との位置する「異なる地平」から、他者の考え方や見方と矛盾対立することの不可避性が帰結する。言い換えれば、つねに人間は自己が位置する中心から視野や身体、活動を拡大するからである。第三に、人間は、特定の「地平」を越えられない人間の有限性の必然的帰結と、同時に「地平」自身が制約され、偏見にさらされているという帰結が生じる。すなわち、人間の有するパースペクティブも、つねに一定の立場の拘束性を免れない。しかし、同時に、人間は、この被拘束性の認識を可能にすることはできる。要するに、他者の立場に立つことの必要性と困難性の自覚が求められるゆえんである。

第四に、現実の人間が生き活動する地平やパースペクティブは、自己の現に位置する場所、生活する伝統や文化、その歴史的・社会的現実を自覚可能にさせる。ただし、それらが、つねにそれらの認識に先行し、彼らの生活や諸活動の前提にされている事態を認識困難にさせていることは否定できない。第五に、人間は、これらの歴史的・社会的文脈のなかでそれらに制約された言語行為を遂行し、そのなかで生きる限り特定の「地平」と無関係で純粋な言語観、

自然主義的な言語観を所有することは不可能である。したがって、筆者の意図する文化批判の営みは、これらの社会批判・歴史批判・言語批判と不可分である。言い換えれば、「地平の拡大」やガダマー流の「地平の融合」という考えの基礎にある両義性や問題は、上記の「文化批判」が欠如すれば、ただちに重層的な錯綜した現実の諸地平の歪みや拮抗状態を見失い、その結果、普遍主義的な言説の呪縛に囚われ、必然的に自己中心主義・独善と独断主義に陥る。他方、ローカリズム、地域主義や自己の歴史的・社会的立場・性差などの主張の仕方には、普遍主義とは逆の意味で「他者の排除」や「議論の地平」を閉ざす陥穽に陥る危険性が生じる。

こうして見ると、人間は「同一の場」に生きていても、異なる文脈や次元の意味にかかわらざるをえないという事態が帰結する。ここで卑近な日常的言語使用に即して、上記の事態を説明してみよう。例えば、「呼称としての〈支那〉」の意味・用法の変遷は、その興味深い一例である。明治以降の日本社会における「シナ」や「支那」という言葉の用法は、中国及び中国人に対する蔑称であったと言っよい。そのため、戦後のある時期から、この言葉は意識的に使用されなくなってきたという歴史がある。ところが、最近の研究によれば、この言葉は、その由来からすれば、

ある種の体制批判の意味を込めた言語行為の表出であった。すなわち、満州族「清」に対抗する漢民族による革命的な言語であった。それからこの言語は、日本社会では日清戦争後、中国に対する蔑称としての含意をもち、さらに第二次大戦後の反省から、支那竹などの日常言語の場面からこの語が追放され、メンマという言葉が市民権を獲得するようになった<sup>(15)</sup>。こうして今日では若い世代の日本人には、シナという言葉の変遷だけでなく、この言葉の存在すら知られなくなっている。

ここでこれらの言語の使用について、一般的な観点からまとめてみよう。すなわち、言語使用における意味論的立場から、簡単な分節化を試みる。第一は、言語の「記述的意味 (descriptive meaning)」である。第二は、「評価的意味 (evaluative) 意味」であり、第三は、「指令的 (directive) 意味」を指摘することが出来る。第四に、「情動的 (emotive) 意味」があり、第五に、「批判的 (critical) 意味」を指摘することができよう<sup>(16)</sup>。第六に、すでに詳しく見たように生活の場での「事実的言語」と「価値的言語」との分離は不可能である。言い換えれば、われわれの言語使用の現段階では、道徳的命題と事実的命題との対立が生じることによつて、この対立の克服可能性という問題もまた、不可避の今日の重要な哲学的課題に属する<sup>(17)</sup>。

但し、言語観の相違により、依然としてこれらの「認識」をめぐって対立が見られることは否定できない。端的に言えば、指示機能的 (referential) 言語観と構成主義的 (constructivist) 言語観との対立を指摘することができ。前者の立場は言語及び認識の中立性を主張する。例えば、この立場によれば、「盲人」を「目の不自由な方」に、chairman を *chairperson* に言い換えたとしても、そこには指示対象や事態の変化は存在しない。他方、後者は言語が現実を構成するという立場を採用する限り、この主張は知的および社会的構成にも妥当する。したがって言語は、偏見や支配や排除の関係の結晶化する場ではなく、これらの社会関係が生み出され、かえって偏見や差別が再生産される場でもある<sup>(1)</sup>。言語行為は、たんに対象の指示や事態の記述に尽きるのではなく、そうした対象や事態を変化させ、同時にそうした歴史的・社会的現実を制約し新たに生み出す営みである。

この対立は、普遍主義的言説と相対主義的言説との相克の一面を代表している、と見てよい。その端的な例が「人權」の普遍性と文化的相対性との対立図式である。また、それに関連して、「文化」(Kultur) と「文明」(Zivilisation) との「Gemeinschaft vs Gesellschaft」の対立図式の解消<sup>(2)</sup>、さらに文化科学と自然科学との対立図式の解消、漢字文化

圏における日本の歴史的課題でもある「和魂漢才」「和魂洋才」「鬼畜米英」「三國人」などのいわば歴史的・社会的に再生産されてきたイデオロの解消にある。

## 七 結論 哲学の岐路と残された課題

最後に、改めて本稿冒頭の問いに戻ろう。端的に言えば、哲学は延命措置ないし安楽死の道を進るのであるか。それとも哲学は新たな出撃拠点を構築することが可能であろうか。上記の困難な課題を直視するとき、筆者には、この問いに対して肯定的で確定的な回答を提示することができない。しかし、上記の諸課題を克服するために、その前提条件を若干提示して、本考察の結論に代えたいと思う。

第一に、言語批判と不可分な「文化批判」が哲学の緊急の機能として発動できなければならない。換言すれば、上記の「言語論的転回」、「解釈学的転回」、「言語遂行論的転回」の成果を組み込みながら、その制約を克服することが必要である。第二に、この場合、肝要な点は、誰が、どのような言語で、どこで、何を、どう語ることができるかにある。第三に、グローバル・スタンダードでこの問題群を設定し直すならば、それは、「文化論的転回」(Cultural turn) と「相互文化哲学」(Intercultural philosophy) との関係把握

にかんする課題である<sup>(20)</sup>。具体的に言えば、「自文化中心主義・自民族中心主義」(ethnocentrism)の相克の緩和の努力であり、「文化相対主義」の陥穽に陥らぬ思考法の構築にある。第四に、そのためには、地政学的(geopolitical)観点の導入が必要である。なぜなら、上述のように、「純粹な言語の遂行論」は不可能だからである。第五に、この認識は、不可避的に次の課題に導く。すなわち「構成主義」ないし「社会構築主義」(Constructivism, Constructionism)の内の再検討という困難な諸課題である。

ここでは誤解の生じないように、まずこの概念が一般に理解されがちな社会学の見解に囚われてはならないという点に注意を促しておきたい<sup>(21)</sup>。第一の論点の場合と同様に、第二の点についても、ハッキングが指摘するように、「構成」概念の文化的批判的な機能に注意を促しておくだけにとどめる<sup>(22)</sup>。そこでここでは暫定的に、哲学的に重要な論争点を列挙しておく。それらは、①「反本質論」②「反実在論」③「知識の歴史的、文化的被規定性」④「思考の前提条件である言語」⑤「社会的行為の一形式としての言語」⑥「相互行為的な社会的実践への着眼」⑦「プロセスへの着目」などである。さしあたり、これら七つの主要な論点の性格付けの再検討が求められるであろう<sup>(23)</sup>。

以上の課題を別の角度から表現すれば、グローバル化時

代の哲学の意義・役割ないし主要課題は、次のように要約可能である。第一に、よく生きることへの「問いの反復」とその非言語的表現にも着目することである。第二に、生の場である歴史的・社会的現実における言語行為を含む「文化」的営みへの哲学的批判を遂行することである。第三に、たんなる理論的な「診断」から社会的実践のための「処方箋」を提示することであり、「言行一致」としての「遂行論」を試みることである。第四に、歴史的生の学としての哲学を制度論・組織論として保証する「言語行為」の日常生活の場での実践にある。第五に、政治的・経済的な脱植民地化と不可分な言語的な脱植民地化の可能性を確保することである。そのためには、当然のことながら、「国境を超えた思索者集団」の連携をいっそう推進する必要があるだろう。筆者は、紙幅の制約上、上記の諸課題に対する解決の方向性を示唆することで擱筆しなければならない。

## 注

カント及びデイルタイからの引用は、慣例によりそれぞれアカデミー版カント全集、ヴァンデンヘック・ルプレヒト版デイルタイ全集から、巻数をローマ数字で、頁数をア

ラビア数字で本文中に記した。ただし、カント『純粹理性批判』については、これも慣例により第一版をA、第二版をBとして本文中に頁数とともに表示した。

(1) この哲学の「自然死」への警告とある種の「諦念」については、坂部恵「いま、哲学とは何か」（小林康夫編『いま、哲学とはなにか』未来社、二〇〇六年三月、九頁）。

(2) 同様な危機感と警告は、すでに筆者が十数年前に拙著『遠近法主義の哲学』（弘文堂、一九九六年五月）の序論で強調していた。そこで指摘した様々な警告にもかかわらず、多くの哲学研究者は、それを無視しないうし看過してきたが、いまや漸く危機的状況を目前にして多くが右往左往しているのが現状である。

(3) 坂部恵、上掲書、一七頁。

(4) デイルタイ全集・第一巻『精神科学序説Ⅰ』（牧野英二編集・校閲・共訳・解説、法政大学出版局、二〇〇六年十二月）の書評『週刊読書人』（二〇〇七年三月三日）、「日号、三頁」参照。

(5) 上掲書、一八頁。

(6) ちなみに、*Historisches Wörterbuch der Philosophie*, 13Bde.(Schwabe, 1971-2007)の編集協力者を務めたD. Scholitz教授は、刊行助成金削減のために、全三〇巻の

デイルタイ全集の編集方針を二六巻に縮小し、別の刊行資金を獲得して残り四巻分のデイルタイ書簡集の刊行を数年規模で実現するとの強い決意を二〇〇七年七月に筆者に語った。また、二〇〇七年一月開催の国際学会報告の中で、韓国のある人文学研究者は、日本の複数の研究者から「人文学の危機」という言葉や、日本ではこうした問題が公的に議論されたという情報を耳にしたことがない、と述べている。『韓国日本近代学会第一六回国際学術大会発表論文集』所収論文、朴相泉「最近の韓国の人文学の自己省察と変化」二〇七頁参照。

(7) Cf. Sheldon Krinsky, *Science in the Private Interest: Has the Lure of Profits Corrupted Biomedical Research?* (Romans & Littlefield Publishers, 2003) 宮田由紀夫訳、海鳴社、二〇〇六年六月。筆者は、以下の点ではクリムスキーの主張に全面的に賛同する。すなわち、大学の「この新しい産学連携、非営利・営利連携は科学と医学の研究者の倫理的規範の変化を引き起こし」、「大学が自分達の科学の実験室を商業的企業の領域に変換し、この商業目的を達成するために教員を採用するようになるにつれて、大学が公共の利益のために科学〔学問〕を行なう機会」が失われる危機に直面しているという点である（前掲訳書、八頁）。もっとも、クリムスキー

自身は、自然科学、特に医学の領域での急激な変貌に伴う問題を論じているが、筆者の管見のかぎり、日本における哲学や人文学の学問領域では、こうした危機意識が希薄である。さらに当該領域の研究者や出版社の多くは、自然科学の場合とは異なり、有力な「公共的利益」がきわめて少ないという不利な学問的条件を挽回しようとして、論文や著書・訳書の刊行が商業目的の達成のために大衆迎合的な「入門書ブーム」を作り出し、それらが外見上は公共の利益に資するように誤解して、その結果、危機の克服が可能であると「錯覚」している点に問題がある。

(8) 筆者は、法的制度のグローバルな影響関係をコロナリズムにおける歴史的観点から考察したことがある。この観点から分析した日・韓の間のグローバル化とジョンとローカリゼーションとの影響関係については、以下の拙論を参照。「租税制度と正義の実現可能性——グローバル・エシックスとリージョナル・エシックスとの間」(『現代におけるグローバル・エシックス形成のための理論的研究』二〇〇三年度〜二〇〇六年度科研費補助金(基盤研究)(B))研究成果報告書、二〇〇七年三月、一二五-一三四頁。)

(9) エルンスト・カッシーラー『シンボル・技術・言語』(法政大学出版局、篠木芳夫・高野敏行訳) 所収の

講演「心理学と哲学」(一九三二年)の中で、彼は、哲学と心理学との「双方には真の *connubium* (婚姻関係) が成立せねばならない」(上掲訳書、二二二頁以下)、と主張している。

(10) これは、*Vertretung/Darstellung* に関する問題に導くが、本稿では、この問題に立ち入ることが出来ないので、問題の所在を確認するだけにとどめる。

(11) ハンナ・アーレント『人間の条件』では、奇妙なことにデイルタイの名前は挙げられていない(ちくま学芸文庫、志水速雄訳、五一九頁を参照)。また、本稿のテーマ及び紙幅の制約上、立ち入ることのできなかったアーレントのデイルタイ解釈をめぐる問題については、次の拙論を参照されたい。牧野英二「歴史のなかの実存の物語り」『実存と歴史』(実存思想協会編、理想社、二〇〇四年一月、五・三〇頁。)

(12) 注(9)で挙げた書物所収のジョン・クロイスによる執筆の序論では、「カッシーラーにとつては、ハイデガーは(ここでは生の哲学者である)」(上掲訳書、一二三頁)、という解釈が示されている。

(13) Cf. Donald P. Verene, *Cassirer's Concept of Symbolic Form and Human Creativity*, in: *Idealistic Studies*, 1978, pp. 14-32.

(14) 『現象学事典』(弘文堂) 所収の「地平」の項目では、

もつばらフッサールやハイデガーに固有の現代的概念であると説明されている。なお、本稿では立ち入ることのできなかつたカントの多様な「地平」概念とその含意については、次の拙論を参照されたい。牧野英「二理性の必要の感情と生の地平」(日本哲学会編『哲学』五五号、法政大学出版局、二〇〇四年四月、四一・五五頁。)

(15) 齋藤希史『漢文脈の近代』名古屋大学出版局、二〇〇五年、二八頁以下を参照。

(16) Cf. C. Welman, *The Language of Ethics*, Harvard. U. P., 1961.

(17) Cf. T. Scanlon, *What We Owe to Each Other*, Harvard U. P., 1998.

(18) アンドレア・センブリーニ『多文化主義とは何か』(白水社、三浦信孝・長谷川秀樹訳、六五頁以下参照。紙幅の制約上、本稿では、クワイン、デイヴィッドソン、ローティにいたる現代のアメリカの解釈学的思潮、とりわけローティによる「自文化中心主義」に対する批判などには、残念ながら立ち入ることが出来ないので、お断りしておく。

(19) Vgl. J. Habermas, *Texte und Kontexte*, Suhrkamp, 1991.

(20) Vgl. *Information Philosophie*, Oktober 2007, S. 30-37.

(21) 構築主義は、「社会構築主義 (social constructionism)」

とも表現されることから、広義では社会学とほぼ同義とみなす立場もあるが、本稿ではこの概念を狭義の哲学的意味で使用する。この概念のいわばインフレ状態とグローバルな知の拡大については、以下の文献が参考になる。ただし、筆者と以下の書物とは原理的な立場が異なることだけは述べておきたい。『社会構築主義のスペクトラム』(中河・北澤・土井編、ナカニシヤ出版、二〇〇一年、三頁以下を参照。)

(22) イアン・ハッキング『何が社会的に構成されるのか』

(出口・久米訳、岩波書店、二〇〇六年、九九頁参照。)

(23) Cf. V. Burt, *An Introduction to Social Constructionism*, Routledge, 1995.

付記 本稿は、法政哲学会当日に「グローバル化時代の哲学の課題——「言語論的転回」及び「解釈学的転回」以後の「生の地平」——という題目で発表した「特別報告」の内容について、タイトルを含め修正・加筆して成ったものである。したがって、本稿は、当日行なった特別報告の口頭発表の一部分にすぎないことをお断りしておく。